様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　5　月　15　日現在

機関番号：34419
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2009 年 ～ 2011 年
課題番号：21520612
研究課題名（和文）第二言語の文法習得における推論の役割に関する基礎研究

研究課題名（英文）　A basic research on the role of inference in the grammar acquisition process of a second language.

研究代表者　濱本　秀樹
（HAMAMOTO HIDEKI　　）
研究者番号：70258127

研究成果の概要（和文）：第二言語の文法習得には Tomasello らの主張する「心の理論」だけでは不十分であり、観察事実からその原因を探る逆行推論である「仮説形成的推論」が大きな役割を果たすことが明らかになった。この心的仕組みにより学習者は新たな言語インプットに意味付けを行うことができ、語、構文の形式と意味の結び付けができるのである。

研究成果の概要（英文）：This research shows that the abductive inference as well as the theory of mind contributes greatly to second language acquisition, particularly to its grammar learning.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	500,000	150,000	650,000
2010 年度	500,000	150,000	650,000
2011 年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：言語学
科研費の分科・細目：第二言語習得論
キーワード：心の理論、仮説形成推論、,帰納推論、絵本理解、認知言語学

１．研究開始当初の背景
いわゆる認知言語学の知見を背景にした言語学習理論は Tomasello らの「心の理論」を第二言語学習の説明に取り上げていたが、研究代表者は実際の小学生などの英語指導での経験から「心の理論」だけでは不十分であり、なんらかの推論プロセスが機能しているのではないかと考えていた。

２．研究の目的
(1) 第二言語学習、特に英語の文法学習に関与する「発見のプロセス」としての推論の働きを探ることを目的とした。

(2) 認知言語学の知見をどの程度まで英語教育に活かせるのかを考えることも目的として設定した。

３．研究の方法
(1) 関連の文献を調査することから始め、実際に児童や学生に英語指導を実施し、実験的にデータを集積し、論考を重ねた。

(2) また多くの研究者と意見を交換するために内外の学会で発表し得られた知見を研究の方向性の修正や適正化に活かした。

４．研究成果

確かに「発見のプロセス」抜きには第二言語の学習は説明できず、そこには「仮説形成推論」と「帰納推論」が重要な作用していることが確認された。また認知的な身体化経験が必要であることも示唆することができた。これを概略的に説明する。

(1)研究成果１　仮説形成的推論（逆行推論、逆モーダスポーネンス）の仕組みの解明

Ｙ同時にＸ　⇒　Ｘ→Ｙではないかな？

（気づき）

○Pierce の仮説形成推論の定義

(i)The surprising fact C is observed

(ii) But if A were true, C would be a matter of course

(iii) Hence there is reason to suspect that A is true

○実際の学習での仮説形成推論の作用

（例）現在進行形の学習

[is　α ing]の発話刺激かつある動作αが進行中⇒　直感による仮説形成

ある動作αが進行中→　[is　α ing]　ではないかな⇒多数反復されると帰納的に規則として認識される。

学習者の内発的文法規則化（気づきの定着）

(2) 研究成果２　学習の２つのモードと仮説形成推論による学習

学習をその学習結果の明示性、黙示性から分類すると次の２つになる。

(i) 潜在学習：学習しようとする意識的な努力とほぼ独立に、また、獲得された内容について明示的な意識をほとんど伴わずにおきる知識の獲得

(ii) 顕在学習：刺激、情報を意識的に処理し、明示的な知識を獲得する。

この潜在学習の特徴としては次の３点が指摘されている。(Berry & Broadbent 1988, Mathews et al.1989)

（１）学習過程の暗黙性

（２）獲得された知識の抽象性

（３）獲得された知識の暗黙性

先の議論と重ね合わせると、仮説形成推論による規則の学習は、経験的な発見学習であり、規則そのものがメタ的に説明されて納得するという演繹的なパターンとはプロセスが異なる。学習した規則そのものを口頭で表現できないことが多いのも使用する推論パターンが違うからと説明できる。

(3) 研究成果３　英語の絵本の認知的理解の仕組みについての仮説

物語を読む、あるいは聞く場合、人は物語のテーマにあうスクリプト（あるいはスキーマ）を想起する（Schank & Abelson 1977）。ここでスクリプトとは「世界に対して持っているステレオタイプ化された特定の状況と動に関する知識構造」のことである。読者（聞き手）はこの先行知識を利用しながら物語の展開のなかに因果関係を予測しながらストーリーを追っていく。

ここで児童の読む「絵本」ではどうなるのだろうか。子供は社会的知識が未熟で複雑なスクリプトを持ち合わせていないと予想される。絵本のテーマは「競争」（ウサギと亀）、「創造と破壊」（ジンジャーブレッドマン）、「破壊と復讐」（3 匹の子豚）といようにテーマが単純でそのバラエティも限られている。4－5 歳児でもこのような単純なテーマに対応するスクリプトの準備ができていると思われる。また、物語の規則性についてもこの年齢までに習得されている。特に L2 として英語を学習する子供は（母国語学習者として絵本を読む子供に対して）スクリプト予測、物語文法ともに優位にある。絵本の特徴はスクリプト構造の単純性以外に、

(i) 絵（静止画）による情報提示が言語による情報より大きいこと、

(ii)繰り返し表現が多いこと

があげられる。L２としての英語の語彙、文法を知らない子供は、静止画援と言語表現を対応させ、仮説形成推論により言語表現の意味を推論し、さらに繰り返しでてくる言語パターンでそれを帰納的に検証できる。絵本の理解にも仮説形成推論が働いているのである。

(4)身体化認知経験の重要性

発見的に文法規則（ここでは意味規則、語彙や構文の使用規則を含む）の学習には学習者の主体的な認知的経験が有用であることが分かってきた。これにはジェスチャー、TPR などの身体動作、認知図式の提示、実物の触感経験などが含まれる。詳しくは今後の研究でさらに明らかにする予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４　件）

①濱本秀樹、「意味に基づく英語文法教育論―動詞、アスペクト、時制篇―」、近畿大学文芸学研究科、『混沌』vol.8-2、2011、15-47、

② 濱本秀樹、「意味に基づく英語文法教育論－名詞を中心に―」、近畿大学文芸学研究科、『混沌』vol.８-1、 2011、1-30、

③ 濱本秀樹、「第二言語習得論の新展開」、近畿大学文芸学部『文学・芸術・文化』、22 巻、1 号、2010、43－67、

④ 濱本秀樹、「早期英語教育における仮説形成推論の役割」近畿大学文芸学部『文学・芸術・文化』、20 巻 2 号、2009、1-32、

〔学会発表〕（計４件）

① 濱本秀樹「早期英語教育の意義」近畿大学公開講座「小学校での外国語活動(英語)その意義と展望早期英語教育の意義」、近畿大学、2010,10,23

② Hideki Hamamoto, “On Fast mapping Phenomena and the Abductive Inference,” Applied Linguistics Association, Brisbane, Australia, 2010,7,5

③ 濱本秀樹、「仮説形成と即時習得」、J-SLA、日本第二言語習得学会第 10 回大会、2010,6,12

④ 濱本秀樹、「絵本理解と仮説形成推論」全国英語教育学会 35 回大会、2009,8,8

〔図書〕（計１　件）

① 森山卓郎、大津由紀夫、濱本秀樹、他 6 名、『国語から始める外国語教育』、慶應義塾大学出版会、2009、

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究代表者
濱本　秀樹（HAMAMOTO HIDEKI）
近畿大学・文芸学部・教授
研究者番号：70258127

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：